

「保守的な若者」再考

——広島県府中町および三次市における質問紙調査の分析を中心に——

吉備国際大学 轡田竜蔵

1 目的

近年、日本の若年層の価値観についての調査研究の多くは、その「保守主義的」傾向に関心を寄せている。生活行動や人生選択において現状維持・現状肯定を優先するという意味での「保守主義的」な価値観は、伝統賛美や排外主義といった「右傾化」とみなされる価値観とも親和性が高いと考え、その関係に注目する研究もある。そうした議論の文脈のなかに位置づけられる本報告は、地方圏の若年層を対象とした最新の実証研究を参照しつつ、「保守主義」の内実に関し、調査分析の方法論も含め、新しい視点を示すことを目的としている。

2 方法

報告者は、2005年以來、岡山県を中心とした地方圏在住の若者に対して、毎年数十人の半構造化インタビュー（各1時間半程度）を実施している。調査対象者の選定にあたっては、多くの若者調査が主な対象としている学生・生徒を除外している。「保守主義」的価値観が社会に与える影響を分析するさいには、労働者や生活者としての実体験と生活意識・社会意識との関連を見ることが重要だと考えたためである。また、2014年度はそれぞれ広島市を中心とする都市圏の「中心」と「周辺」に位置する府中町と三次市において、住民基本台帳から無作為抽出した20~30代の住民各1,500人を対象とする質問紙調査を実施したほか、それと並行して、質問紙調査を補完するかたちでの半構造化インタビュー調査を、数十人を対象に行っている（公益財団法人マツダ財団委託研究）。本報告は、上記の質問紙調査を中心に議論するが、補完するインタビュー調査は継続中であり、調査分析は集計結果を中心とした中間報告にとどまらざるをえない。そのため、本報告では、近年実施した関連する半構造化インタビュー調査の結果も参照し、これを補完したいと考えている。

3 結論

「保守主義」的価値観と「リベラル」な価値観は、思想的には対立したものとみなされるわけだが、調査データを分析してみると、イデオロギー的に一貫していない層が圧倒的多数派であるという現実が浮かぶ。また、近年の排外主義研究においても「誰もが排外主義者になりうる」リアリティの重要性がとみに指摘されている。このような状況を踏まえれば、例えば、もはや支持率がきわめて低い権威主義的価値観の支持者を特定し、それを（批判的な意味で）「保守主義」とラベリングする方法には限界がある。「保守主義」の多層性を分析する理論が妥当性を持つためには、共感性が比較的高いと考えられる調査項目を用意し、分析モデルを作っていく必要がある。当日の報告では、その試案を提示したい。